Euro-NARASIA | SERIAL REPORT

古都のヒト休み Ⅳ
―二上山と山越阿弥陀―

大川真
Makoto OKAWA

その地域に住まないと分からない言葉がある。「上（カミ）のほう」「下（シモ）のほう」、「山」、「丘（岡）」などがそうだ。地名や方角を表す言葉には、地域住民が一義的にそれを思い浮かべることができる時に、固有名詞ではなく普通名詞が使われる。前回のエッセイから折口信夫『死者の書』について書いているが、その調査の過程で、二上山が存在する一帯が古代は「大坂」と言われていたことを渡部修氏の論文によりはじめて知った（註1）。金剛山脈・葛城山脈が走るこの地域は、境界を意味する「サカ」と呼ばれるのに確かに相応しい。「サカ」は他の地域との区切りだけを意味するわけではない。「サカ」の向かい側の地域から何かがもたらされることも含意している。前掲渡部氏は次のように述べている。

東西を基軸としたヤマトの信仰的世界観という点からいえば、西の「大坂」の向こうにある世界とは出雲なのであろう。それは東の「墨坂」の彼方に伊勢が控えていることと対応している。しかし、古道を視点としてみた場合、「大坂」の背後に控えた世界は些か様相を異にする。「大坂」の背後は河内であり、それは難波へと続いている。そしてその先には西国を経て朝鮮半島が、更には当時の最先進地域たる大陸が控えているのである（註2）。

古代日本において、大陸からもたらされた最先端の思想が仏教であり、浄土教であった。「オオサカ」であった二上山一帯には浄土教に由来する仏教芸術が多く遺っている。しかし、この地がなぜ葬送の場として古くから選ばれたのかは地理的条件だけでは説明できない。この地のアーカイブを紐解くことにしよう。

二上山地域関係古道図

（渡部修「ヤマトの西と東と－古道にみる二上山地域－」万葉古代学研究所年報第7号
（財団法人奈良県万葉文化振興財団・万葉古代学研究所編集、2009年3月発行）より引用）

二上山の当麻寺は、天平年間の初頭に当麻（たぎま）氏の氏寺として創建されたという説がある。この当麻氏は、葛城市竹内の北を本拠地とし葬送をつかさどる氏族であったことが、田中日佐夫氏の名著『二上山（註3）』に書いてある。以下、田中氏の研究に依拠して、当麻氏のことを少し紹介したい。この氏族の物語を知ることが二上山のゲニウス・ロキ（genius loci）を探り当てることに繋がるのである。

当麻氏の伝承について田中氏が注目したのは以下の『続日本紀』慶雲四年（７０７）十一月丙午（一二日）の「従四位上当麻真人智徳、誄人を率いて誄を奉る。謚（おくりな）して倭根子豊祖父（文武）天皇と曰ふ。即日、飛鳥岡に火葬す。」という記述である。当麻智徳（ちとこ）は、ほかに持統天皇の葬儀（大宝三年（７０３）十二月十七日）にも関わっている。「従四位上当麻真人智徳、諸王・諸臣を率いて、太政天皇に誄を奉る。謚して大倭根子天之広野日女尊と曰ふ。是の日、飛鳥岡に火葬す。」（『続日本紀』）。田中氏が注目したのは「誄」という字である。現代の私たちがほとんど目にすることのないこの字は音読みで「ルイ」、訓読みで「しのびごと」と読む。「誄」はもともと古代中国に見られた葬送儀式に関わる言葉で、論語にも出てくる。以下、本文と朱子の注釈書（論語集注）を参考にした現代日本語訳を示そう。

子の疾［やまい］、病［へい］なり。子路、禱［いの］らんと請う。子曰く、諸れ有るか、と。子路対［こた］えて曰く、之［こ］れ有り。誄に曰く、爾［なんじ］を上下の神祇に禱る、と。子曰く、丘の禱るや、久し、と。

（『論語』述而篇）

（先生の病気が重篤となった。子路が天神地祇にお禱りしたいと願い出た。先生は「お禱りして回復の効果があるのか」と問うた。子路が答えて、「誄の言葉に『なんじの行いの過ちを悔い善に遷って天神地祇のたすけを禱る』とあります」と言った。先生は「そうであるなら私は善を行ってきたので天神地祇に長い間「禱る」ことをしてきたことになる。だからわざわざお前が私のために禱る必要はないのだよ」と答えた。）

論語の場合、誄は神祇への祈禱の言葉としてあったようであるが、一般的には火葬の前に、死者の生前の功徳をたたえ、追慕する言葉として理解される。わたしたちの葬儀で言えば弔辞が相当する。平凡社の世界大百科事典での「誄」の項目を担当した本田義憲氏が述べている通り、おそらく大陸文化流入以前から日本では「シノビコト」の風習があり、その風習に「誄」の字が後からあてられたのであろう。現代でも昭和天皇が崩御なされた際に、現上皇陛下が誄詞をお贈りされている。当麻氏に関していえば、続日本紀の記述にある通り、彼らはこの誄を専従的に行う氏族で

あったことを田中氏は述べている。

それは当麻氏の誄儀礼が、死出の旅路の決定的段階を確定づける性質のものであったことをしめしている。おそらくかれは、遺体にたいして、諡をつけるという最大の慰撫をおこなうとともに、死霊がこれからゆくべき世界を明確にさししめし、迷うことなくその世界にいきつくように「魂しずめ」をおこなったのであろう。その上で、遺体に付属していた生前の行跡を、死霊と切りはなしてこの世にのこす役目をも、になっていたのかもしれない。すなわち、かれとかれの一族は、特殊な力をもつ言葉を使う特技をそなえていたと同時に、死者の行くべき世界にたいしても、明確なイメージをもっていたものとおもわれる（註4）。

折口信夫『死者の書』では、大津皇子やその想い人である耳面刀自（みみもとじ）をめぐる悲しくも美しい因縁を神憑（かみがか）った老婆が語るが、その老婆は当麻氏の出身なのである。

郎女［いらつめ］さま。

緘黙［しじま］を破つて、却てもの寂しい、乾声［からごえ］が響いた。

郎女は、御存じおざるまい。でも、聴いて見る気はおありかえ。お生れなさらぬ前の世からのことを。それを知つた姥でおざるがや。

一旦、口がほぐれると、老女は止めどなく、喋［しゃべ］り出した。姫は、この姥の顔に見知りのある気のした訣［わけ］を、悟りはじめて居た。藤原南家にも、常々、此年よりとおなじような媼［おうな］が、出入りして居た。郎女たちの居る女部屋までも、何時［いつ］もずかずか這入［はい］って来て、憚りなく古物語りを語った、あの中臣志斐媼［なかとみのしいのおうな］―。あれと、おなじ表情をして居る。其も、尤［もっとも］であった。志斐ノ老女が、藤氏の語部［かたりべ］の一人であるように、此も亦、この当麻［たぎま］の村の旧族、当麻ノ真人［まひと］の「氏［うじ］の語部」、亡び残りの一人であったのである。

（折口信夫『死者の書』（註5））

私は当初読んだ時は、老婆が語る物語は大津皇子の英雄叙事詩（heroic epic）として捉えていたが、田中氏の研究書を読んだ後では、当麻氏の神態（かみわざ）による誄詞として考えるべきだと思い直している。

田中氏によれば、天平勝宝六年（754）に大皇太后の葬儀に

安宿（あすか）王が誄を行って以降、文献上で誄儀礼は見られなくなり、かわりに仏教儀礼が天皇家をはじめ諸大官の葬送を担うようになるという。折口信夫『死者の書』が描いている阿弥陀信仰、浄土信仰はまさにその時期の精神史的雰囲気をよく表しており、『死者の書』執筆のモチーフとなった当麻曼荼羅はこの時期に創作された浄土教美術のなかでも珠玉の作品である。

「曼荼羅」とはあるが、当麻曼荼羅は、阿弥陀仏の治める極楽浄土の図相を表した阿弥陀浄土変相図であり、唐の善導の『観無量寿仏経疏』に基づいた図解である。浄土信仰の隆盛にともなって、当麻寺に所蔵されたオリジナルの当麻曼荼羅をもとに各地で数多くの転写本が作られた。奈良国立博物館にも鎌倉時代に製作されたもの（伝、河内国浄土院蔵）が所蔵されている。

当麻曼荼羅の縁起については、建長六（１２５４）年に橘成季によって書かれた『古今著聞集』に詳しい。天平宝字七年（７６３）、横佩（よこはぎ）の大臣の女（むすめ）である中将姫が出家し、生身の阿弥陀仏を見る誓願を発（おこ）した。七日間祈念したところ、一人の比丘尼（びくに）（化女）が突然現れ、百駄の蓮茎（はすくき）を用意せよと告げた。その話を聞いた天皇は、忍海上人に命じて近隣の国中から蓮茎を数日で集めさせ、そこから蓮糸を得た。姫は化女の助けにより、一夜のうちに、荘厳な浄土が描かれた曼荼羅を蓮糸で織り上げたと言う。当麻寺に伝わる『中将姫山居語』でもおおよそ同じ話が書かれている。折口はこの中将姫伝説に多くを負いながらも、独自の物語を紡ぎ出している。中将姫（郎女）が曼荼羅の製作を思うに至った契機は以下のように描写されている。

郎女の額［ぬか］の上の天井の光の暈［かさ］が、ほのぼのと白んで来る。明りの隈［くま］はあちこちに偏倚［かたよ］って、光りを竪［たて］にくぎって行く。と見る間に、ぱっと明るくなる。そこに大きな花。蒼白い蕚。その花びらが、幾つにも分けて見せる隈、仏の花の青蓮華と言うものであろうか。郎女の目には、何とも知れぬ浄らかな花が、車輪のように、宙にぱっ

折口信夫肖像
（提供：國學院大學折口博士記念古代研究所）

と開いている。仄暗［ほのぐら］い蕋［しべ］の処に、むらむらと雲のように、動くものがある。黄金の蕋をふりわける。其は黄金の髪である。髪の中から匂い出た荘厳な顔。閉じた目が、憂いを持って、見おろして居る。ああ肩・胸・頸［あら］わな肌。—冷え冷えとした白い肌。おお　おいとおしい。

郎女は、自身の声に、目が覚めた。夢から続いて、口は尚夢のように、語を逐うて居た。

おいとおしい。お寒かろうに—。

（折口信夫『死者の書』（註6））

ゴルゴタの丘に登るキリストの姿を彷彿とさせる大津皇子の亡霊が、郎女のところに現れる場面である。裸身が露わになった大津皇子に着せるために、郎女は蓮糸で衣を織り上げることを思いついたのであった（註7）。そして織り上げた巨大な帛衣をキャンバスにして、夢現のなかで見てきた浄土や「俤人」［おもかげびと］（阿弥陀仏であり大津皇子）の荘厳で甘美な姿を描いたのが当麻曼荼羅であるとされる。

ところで折口自身も「私の物語なども、謂わば、一つの山越しの弥陀をめぐる小説、といってもよい作物なのである（註8）。」と述べているように、『死者の書』の成立を考える上で欠かすことが出来ないのが、山越阿弥陀である。

綴織當麻曼陀羅 平成本
（當麻寺奥院所蔵）

去年の春分の日の事であった。入り日の光りをまともに受けて、姫は正座して、西に向って居た。日は、此屋敷からは、稍［やや］坤［ひつじさる］によった遠い山の端に沈むのである。西空の棚雲の紫に輝く上で、落日は俄かに転［くるめ］き出した。その速さ。雲は炎になった。日は黄金の丸［まるがせ］になって、疑うほど、鮮やかに見えた山の姿。二上山である。その二つの峰の間に、ありありと荘厳な人の俤［おもかげ］が、瞬間顕［あらわ］れて消えた。後は、真暗な闇の空である。山の端も、雲も何もない方に、目を凝して、何時までも端坐して居た。郎女の心は、其時から愈々澄んだ。併し、極めて寂しくなり勝［まさ］って行くばかりである。

ゆくりない日が、半年の後に再来て、姫の心を無上［むしょう］の歓喜に引き立てた。其は、同じ年の秋、彼岸中日の夕方であった。姫は、いつかの春の日のように、坐していた。朝から、姫の白い額の、故もなくひよめいた長い日の、後である。二上山の峰を包む雲の上に、中秋の日の爛熟した光りが、くるめき出したのである。雲は火となり、日は八尺の鏡と燃え、青い響きの吹雪を、吹き捲［ま］く嵐―。

雲がきれ、光りのしずまった山の端は細く金の外輪を靡［なび］かして居た。其時、男岳・女岳の峰の間に、ありありと浮き出た　髪　頭　肩　胸―。

姫は又、あの俤を見ることが、出来たのである。

（折口信夫『死者の書』）（註9）

その音も聞えるか、と思うほど鋭く廻った。雲の底から立ち昇る青い光りの風―、姫は、じっと見つめて居た。やがて、あらゆる光りは薄れて、雲は霽［は］れた。夕闇の上に、目を

春分秋分の彼岸中日、二上山の雄岳と雌岳に沈みゆく夕日の圧倒的な美しさに阿弥陀仏の崇高な姿を古代の日本人は重ねた。大阪の四天王寺では長らく途絶えていた日想観の法要を２００１年から再び行っている。この「彼岸」（彼岸会）という行事だが、その由来を考えるとなかなか複雑である。「彼岸」という言葉は、迷いの世界である「此岸」に対して、悟りの世界を表す仏教語である。それが春分秋分の二回に法要を行うようになる契機の一つは、当麻曼荼羅の成立にも影響を与えた善導『観無量寿仏経疏』にある日想観の文言である。日想観は、十六ある観想行の第一であり、西に没する太陽を観想して極楽浄土を思い浮かべるという行である。善導は、真東より日が出て真西に日が没する春分、秋分の日にその行を行うのが相応しいと解釈している。こうした日想観に基づく彼岸会であるが、浦西勉氏の研究によれば、四天王寺、興福寺、比叡山の下級僧侶の活動によって中世後期から近世にかけて普及していったようである（註10）。浦西論文でもう一つ重要な点は、彼岸会の活動母体が、中世までにすでに民衆に存在した彼岸での山ごもりの風習にあったことを指摘していることである。彼岸の日想行には女の山ごもりの風習があったことを折口も述べている。

昔と言うばかりで、何時と時をさすことは出来ぬが、何か、春と秋との真中頃に、日祀［ひまつ］りをする風習が行われていて、日の出から日の入りまで、日を迎え、日を送り、又日かげと共に歩み、日かげと共に憩う信仰があったことだけは、確かでもあり又事実でもあった。そうして其なごりが、今も消えきらずにいる。日迎え日送りと言うのは、多く彼岸の中日、朝は東へ、夕方は西へ向いて行く。今も播州に行われている風が、その一つである。而も其間に朝昼夕と三度まで、米を供えて日を拝むとある。（柳田先生、歳時習俗語彙）又おなじ語彙に、丹波中郡で社日参りというのは、此日早天に東方に当る宮や、寺又は、地蔵尊などに参って、日の出を迎え、其から順に南を廻って西の方へ行き、日の入りを送って後、還［かえ］って来る。これを日［ひ］の伴［とも］と謂っている。宮津辺では、日天様［にってんさま］の御伴と称して、以前は同様の行事があったが、其は、彼岸の中日にすることになっていた。紀伊の那智郡では唯おともと謂う……。こうある。

何の訣［わけ］とも知らず、社日や、彼岸には、女がこう言う行［ぎょう］の様なことをした。又現に、してもいるのである。年の寄った婆さまたちが主となって、稀に若い女たちがまじるようになったのは、単に旧習を守る人のみがするだけになったと言うことで、昔は若い女たちが却［かえ］って、中心だったのだろうと思われる。現にこの風習と、一緒にしてしまって居る地方の多い「山ごもり」「野遊び」の為来［しきた］りは、大抵娘盛り・女盛りの人々が、中心になっているのである。順礼等

と言って、幾村里かけて巡拝して歩くことを春の行事とした、北九州の為来りも、やはり嫁入り前の娘のすることであった。鳥居を幾つ綴って来るとか言って、菜の花桃の花のちらちらする野山を廻った、風情ある女の年中行事も、今は消え方になっている。　（折口信夫「山越しの阿弥陀図の画因」（註11））

何かに取り憑かれたかのように野山を歩く郎女（いらつめ）は、折口によれば「信仰においつめられたと言うより寧ろ、自ら霊（たま）のよるべをつきとめて、そこに立ち到った（註12）」のであった。わたしは今、リヒャルト・シュトラウスが１８８８年に作曲した「乙女の花」作品22を聴きながらこの小文を書いている。指揮はウォルフガング・サヴァリッシュ、演奏はフィラデルフィア管弦楽団、バーバラ・ヘンドリックスがソプラノを担当した盤を聴いている。フェリックス・ダーンが詞を付けているが、第一曲のKornblumen（矢車菊）は、サファイアにも例えられる青紫色をした可憐な花に、乙女の純朴な敬虔な宗教的情念をなぞらえた美しい作品である。この曲を聴くと、山ごもりをした往（い）にし方（え）の女たちのことを想う。

二上山に沈む夕日（提供：PIXTA）

註1　渡部修「ヤマトの西と東と―古道にみる二上山地域―」（『万葉古代学研究所年報』7所収、２００９年）

註2　渡部修「ヤマトの西と東と―古道にみる二上山地域―」p. 16。

註3　田中日佐夫『二上山』（学生社、１９６７年）。

註4　田中日佐夫『二上山』pp. 142―143。

註5　折口信夫『死者の書・身毒丸』（中公文庫、改版、２００９年）、p. 27。

註6　折口信夫『死者の書・身毒丸』（中公文庫、改版、２００９年）、p. 125。

註7　折口の内弟子で國學院大學名誉教授の岡野弘彦氏は、折口が未完成霊の行方に心を痛めタマシヅメ（霊魂）の書として『死者の書』を書いたと指摘している（『折口信夫伝―その思想と学問―』、中央公論新社、２０００年など）。オリジナルの中少姫伝説が阿弥陀仏の来迎と姫の往生を主題にしているのに対して、『死者の書』ではそれに加えて、郎女による大津皇子の亡魂へのタマシヅメも重要な要素となっている。

註8　折口信夫『死者の書・身毒丸』所収「山越しの阿弥陀の画因」（中公文庫、改版、２００９年）、p. 163。

註9　折口信夫『死者の書・身毒丸』（中公文庫、改版、２００９年）、p. 54。

註10　浦西勉「彼岸会―民間における彼岸の風習―」（伊藤唯真編『仏教民俗学大系六　仏教年中行事』所収、名著出版、１９８６年）。

註11　折口信夫「山越しの阿弥陀図の画因」、『死者の書・身毒丸』（中公文庫、改版、２００９年）、p. 169―171。

註12　折口信夫「山越しの阿弥陀図の画因」、『死者の書・身毒丸』（中公文庫、改版、２００９年）、p. 169。

おおかわ・まこと｜
1974（昭和49）年、群馬県生まれ。東北大学文学部卒業後、同大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門は、日本思想史。東北大学大学院文学研究科助教、吉野作造記念館館長を経て、現在、中央大学文学部人文社会学科哲学専攻准教授。著書に『近世王権論と「正名」の転回史』（御茶の水書房）ほか。